

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】山田 綾乃

【所属】(助成決定時) 早稲田大学文学研究科考古学コース博士後期課程

【研究題目】古代エジプトにおける建設労働者の組織形態の解明

## 【研究の目的】(400字程度)

古代エジプトを代表する巨大な石造建造物を造営するには、莫大な労働力が必要とされた。加えて、その労働力を組織的に管理し、統率することが求められたであろう。現在、労働者の組織形態の研究では、10班の小規模集団が集まって1つの中規模集団を形成し、さらにその中規模集団が5つ集まって大規模集団を形成し、その大規模集団が1つの建設現場に2組従事していたという構造が基本とされている。ただし、現代の建設現場でも工程や作業内容によって組織形態が異なるように、古代においてもその基本形態が全作業・全時代を通じて同じとは考え難い。従って、より具体的な労働者組織形態について追究すべきである。

とりわけ現段階では、石材の加工工程ごとに従事している労働者の組織形態が異なっているのではないかという視点に欠けている。細分された工程やその作業に携わった労働者集団について論じるには、まず石材の加工痕と作業過程でしるされた文字(「グラフィティ」)の残存状況を分析し、文字がしるされた工程を特定することが重要である。

よって本研究では、建設作業の各工程の労働者組織形態解明を目的として、既存資料のデータベース化とともに、エジプトでの現地調査で資料の収集・実見・撮影・観察を実施した。現地で報告書に記載の少ない石材の加工痕と文字の関係について情報を得て、既存資料にその成果を反映し、分析・考察に応用する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、古代エジプト古王国時代のメンフィス・ネクロポリス地域の石造建造物の石材にしるされた文字資料を対象とした。この文字資料とは、一般に「グラフィティ」や「工人マーク」と呼称されるもので、建設作業の過程でしるされた労働者のメモ書きに相当する資料である。これには労働者の集団の名称も含まれることから、労働者組織の解明においてもっとも重要とされる資料である。

既存資料のデータベース化は、各属性と写真・図版を一括して閲覧できる環境と多項解析を可能にさせるため、Excelにて情報を集めたのち、随時 File Maker へデータを移行した。

エジプトでの現地調査は、政情不安の影響を受け安全を第一に考慮し期間を2週間に縮小し、メンフィス・ネクロポリスのギザ遺跡において実施した。特に成果があったのは①クフ王のピラミッド南東にある王妃のピラミッド(GI-c)と、②同じくクフ王のピラミッドの南側にある木造船埋納ピットの蓋石の資料である。

①に関しては、現場で資料の写真撮影とスケッチを行い、石材の状態、グラフィティの細部をつぶさに観察した。ここでは、ピラミッドの裾部分に当たる特徴的な形状の石材に文字が残されており、それらの石材の多くが加工の途中段階で作業を終えている状態であった。先行研究では石材の加工工程は4段階があることが指摘されているが、本資料からはそれ以上に細分されることが分かった。さらに、しるされた文字の残存状況から、石材加工のどの工程でしるされたかを特定していった。

一方、クフ王のピラミッド南側にある木造船埋納ピットの蓋石資料は、1950年代に発掘された第一の船の資料と、現在も早稲田大学エジプト学研究所および太陽の船復原研究所主導で発掘を継続している第二の船の資料とが存在する。今回は両研究所の協力を得て、既に発掘作業が完了している第一の船の資料の閲覧の許可を得ることができた。

現地調査で得た資料はデータベースに集約し、文字がしるされた段階を特定する基準の一つとして分析・考察に用いた。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

現地調査では、ギザ遺跡内の石造建造物およびクフ王のピラミッド南側・船坑の蓋石について、特に石材の加工工程と文字の関係性に着目して観察を行うことができた。クフ王の王妃のピラミッド西側の最下段およびその１段上に設置された表装石からは、計８点のグラフィティを記録し、これらはいずれも既存の報告にない資料であった。この石材の中には、①様々な建材や石製品等に汎用的な形状で採石されたのち、表面が研磨された段階のもの、②ピラミッドの表装石として用いるために周囲が荒割りされた段階のもの、③ピラミッドの外装の角度に合わせて表装を整えるために長斧で整形している途中の段階にあたるものなど、段階的に異なる加工途中のものが含まれていた。またそれぞれの加工により、石材にしるされたグラフィティが欠損を受けていた。この欠損状態の分析から、②の段階で欠損を受けている文字（「アंक」）などは、いったん採石場から切り出され適度に成形された石材が、ピラミッドの表装石として使用されるまでの段階、すなわち石材加工の初期段階にしるされた文字であることが明らかになった。この文字は、石材の全面に大きくしるされ、識字能力が無いまたは低い労働者向けに用いられたと言われている文字である。本結果から、同様の特徴を有する文字（ex.「ウアス」「ネフェル」など）も、同じく石材加工の初期段階にしるされる文字に該当する可能性が高いといえる。採石場か建設現場でしるされており、高度な識字能力を必要としない場面であることを考慮すると、「アंक」を始めとした文字を使用した労働者の集団は、採石場から切り出された石材を建設現場まで石材を運ぶという比較的単純な石材運搬の作業に従事していたと考えられる。

以上のように、本研究では現地調査の観察によって得た情報から、石材加工の初期段階に従事した労働者の様相について考察を加えることができた。労働者の組織形態の全容解明には、今後も本研究によってまとめられたデータベースと現地調査成果を用い、研究を継続していくことが必要である。

尚、本研究で行った現地調査では、NPO 法人太陽の船復原研究所（所長・吉村作治先生）および早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎先生）、エジプト・太陽の船博物館関係者の皆様から多大な御協力を賜った。末筆ながら心より御礼を申し上げる。